

＜行きませ＞ と 赤瀬さんは言った。

あれは、1991年4月15日のことだった。場所は愛媛県今治。赤瀬範保さん宅。台所にあるテーブルの上に、90cm×180cmの生成（きなり）の木綿布が置かれ、絵皿には金泥（きんでい）、そして筆が用意してある。

気迫に満ちた赤瀬さんが、そこに立っていた。

1990年1月に、サンフランシスコにある＜The Names Project＞から200枚ほどのメモリアル・キルトをお借りし、日本の主要都市9か所で巡回展示しようと、その実行委員会組織としてつくられたのがMQJだった。（もちろん開催地にもそれぞれ実行委員会が組織され、MQJはそれを統括する位置に居た）翌年の4月初めに京都展がスタートし、次は博多。そして広島展が4月17日。その2日前の話である。

まず赤瀬さんは漢詩（寒山詩）を書き始める。

＜この世の中は若くて優秀な奴が早く死に、私の様な、どうしようもないような年寄りがかえって長生きしている。この詩の中のその言葉が気に入った。若い仲間が次々と倒れている。どうしてもそれを伝えたい。＞

和紙の上に墨で書くのとはわけが違う。ましてやシーチングの様なさっぱりとした布では無い。ざっくりとした手織り布にどろっとした金泥で書くのだ。一文字書くのに何回も金泥を含ませなければいけない。書くというより、これは彫刻刀やノミで掘っているようだ。その時彼の左後方で見ていた私は申し訳ない気持ちでいた。（その布はキルトを作りたいから送ってくれと赤瀬さんに頼まれ、せっかくだから雰囲気のあるものをと、中国雲南の人達の手で織られたものを選び私の方から送っていたものだった。）寒山詩はかなりの分量がある。1時間ほど経ただろうか、途方もないような作業を続けている赤瀬さんの体がやがて小刻みに震えているように見えた。脂汗が流れ、立っていられなくなり最後の数行を残して赤瀬さんはベッドに。もう今日は無理やなと私は思った。でも赤瀬さんは少し休んだだけで起き上がって来て「今やらなきゃ」と、再度布の前に立ち、残りの行を書き終える。

そこから赤瀬さんは金泥の皿を片付け、新しい真っ白な皿と、大きな筆を用意する。

そして長いチューブの先に注射針が取り付けられているものを持ち出し、一言、「行きませ」と言ったかと思うと、慣れた手つきで左手の甲のあたりに浮き出た血管に注射針を刺す。

（血液製剤もこんなふうに自己注射しているのかもしれないと、ふと思った）濃く赤い液体がチューブを通り白い絵皿に流れる。そこに赤い顔料をたっぷり足しその大きな筆で混ぜる。

寒山詩は鉛筆で下書きしていたものをなぞったのだが、あとは何も下書きは書かれていない。一番上のあたりのスペースを見据えて、一気に大きな〈愛〉という字を書きつけた。

まさか愛とは。ふいをつかれた。漢詩の小さな文字を書くよりも数倍速く書いたように感じられた。ほとぼしる様な、たっぷりとしてしかも端正。何と見事な書なのだろう。

それまでの重苦しい作業が、その赤からまるで、陽光が満ちていくような世界に鮮やかに変わっていくのを感じていた。その後その〈特別な赤〉で、布中央に心臓を表す象形文字〈心〉を、漢詩の中に溶け込むように〈般若波羅密多心経〉と配した。そして布の下部に、〈風よ雲よ伝えてよ〉と立原道造の詩の一節を書き、年月日、書道家でもあった彼の画号〈青雲〉と打ち止めた。

やがてそのキルトは、名古屋、金沢、松本、東京、仙台、旭川と、アメリカのキルトや京都展の前に当時駒込病院の感染症科の医長をされていた、根岸先生から届けられたイニシャルだけ縫いつけられた〈ホワイトキルト〉などと共に旅をしていく。いつの間にか〈愛のキルト〉と呼ばれるようになったこのキルトの強いメッセージは、その旅に同行していたネームズ・プロジェクトのスタッフ達の胸をも打ち、その年の6月にイタリアで行われる国際エイズ会議会場でのキルト展示に是非招待したいと申し出でを受ける。「私たちは今まで何万というキルトを預かり見て来たけれど、このような強く温かなメッセージを持つキルトは見たことが無い」と。日本における巡回展が終わった後、エイズ予防財団のスタッフの手により〈愛のキルト〉はイタリアに行き、その会場に展示される。

ちょうどその日に、赤瀬さんは急死。不帰の人となった。

なぜ自らの血液を用いたのだろうか

なぜ愛と書いたのだろうか。

語録

あなた方の生き方について
外からとやかくいうべきではない
あなたがたがどのように生きようと
私たちは何もいえないと思います

私はエイズでかまいません
エイズということで差別されてきたのだから
エイズということで差別を撥ねのけたい

みんな高いところからものを見るから
でたらめな世の中になる

(追補)

のこりの人生は、さわやかにいきたい

これは1947年に岡山県の国立療養所長島愛生園に強制収容され、1995年すい臓がんで死去された、島田等さんの詩集「次の冬」(論楽社ブックレット No.6)にある詩「終りよ 一鎮魂 赤瀬範保」の末尾に、赤瀬範保による語録として付記されたものである。

赤瀬さんが突破した地平に、<くらい>と呼ばれた人たちも連なる。

生前赤瀬さんは長島を訪ねている。

赤瀬さんの死後、彼らが国に向け気が遠くなる様な時間のくびきを解き放たんと、立ちあがったその発心の向こうには、赤瀬さんが歩いているように思えてならない。

あの時確かに赤瀬さんは「行きまっせ」と言った。

2号前のMQJニュースで、魚守淳さんがとても印象に残るエッセイを書かれていた。同じ言葉を繰り返して述べることの違和感。そのことで澱のように溜まっていき、いつの間にか汚れていく心根。

私は年に一回のキルト展で、そこに来て下さった人達に、例えばこのように赤瀬さんの事、キルトの事を伝えているみたいだ。私のごくごく短い時間赤瀬さんに出会って間もなく逝かれてから、すでに20年という月日が経っている。でも<あの時>を昨日のように話している私とは何か。はたから見ると、同じセリフを繰り返しているように見えるだろうと思う。私もたまたま話していて、講談師みたいやな。と想うことがある。ヒロイックになってるんとかうか。正義面したあんたみたいなのが一番危ないんや。そんなふうにもいつも思っている。

20年経ってあの赤の色も、金泥も変わってきている。私の記憶も私自身も変わってきている。比較するのもおこがましいが、ふと沖縄戦の語り部、被爆者の語り部の人達の苦悩を想う。

私は私を嘘っぱちやと芯から思っている。だからそこからいつも始めないといけないと思っている。その芯のところをノックしてくるものがキルトには確かにある。道徳を語りたくない。語ろうとして語りたくない。私のどこか切羽詰まった所にある「言葉」が疼いていれば話して行こう。

魚守さんがそんな私の言葉を聞いて「いいなと思った」と書いてくれた。

何より嬉しく救われた言葉だった。

斎藤 洋